

BOOK REVIEW

発達障害の作業療法

最初に、本誌は筆者にとって首を長くして待ち望んでいた出版物の1つである。なぜなら、法律によって定義される「発達障害児・者」に対する作業療法のかかわりについて包括的に述べたものがなかなか見当たらなかったからである。企画された編集委員諸氏にまずもってお礼を申し上げたい。

本増刊号を読者に推薦する理由はいくつかあるが、第一に対象者の年齢が幼児期から成人まで広範囲にわたっていることが挙げられる。今回の増刊号では大学生への支援や就労支援に関していくつかの事例も含めて取り上げられており、この分野で孤軍奮闘している OT にとっては熟読する価値のある記事となろう。

中でも特筆しておきたいのは、発達障害者の恋愛・結婚について当事者の声も含めて触れられていることである。こういった内容は医学モデルの範囲に収まりにくいいため、医療機関で働く OT の中には初めて目にする、という方も多いであろう。しかし、人間の作業の多様さは障害の有無によって制限されることがあってはならないのであり、当事者から相談を持ちかけられたときに戸惑うことのないよう、研鑽を積んでおくべき領域である。

第二に、評価と支援に関して目を配っておくべき内容が網羅されている点である。もちろん、一人の OT がすべてにわたる技法をマスターすることは困難であるが、対象者が必要としている支援の内容を確定し、効果的な支援を可能とするためには、

ライフステージのどの時期にどのような評価と支援を行うべきか理解しておく必要がある。

特に保育園・幼稚園や学校から支援の要請があった場合、個別セラピーとはまったく異なる条件下で評価と支援を行う必要があるため、他職種との連携のあり方やわかりやすい情報提供の仕方などについて本増刊号は多くの有益なヒントを与えてくれるであろう。

他にも OT のサービスを提供できる領域として、地方自治体や NPO、放課後等児童デイサービスなど多岐にわたって紹介されている点、物的・人的資源が都市部のように豊富ではない地域での作業療法サービスのあり方にも触れられている点など、これまで教科書レベルではあまり扱われてこなかった面にも目配りが行き届いている点が推薦に値すると思われる。

可能であれば次の機会に取り上げていただきたいのは、発達障害の当事者、特に保護者から見た作業療法のあり方である。ライフステージのそれぞれの時期において提供された作業療法がわが子にどのような影響を与えたか、役に立たない内容はなかったか、今から振り返るとこのようなサービスがあるとよかったなど、忌憚のない発言をお聞きすることができれば、OT の独りよがりを防ぐだけではなく、より効果的な作業療法の内容を保証することにつながるのではないだろうか。



● 作業療法ジャーナル第52巻第8号 (増刊号)

(B5/220 頁 / 3,800 円+税/三輪書店/2018 年)

評者

永井洋一

新潟医療福祉大学 教授、
作業療法士